The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	異文化接触における日本人留学生のアイデンティティ変容 ： 青年女子の英・米語圏留学を中心に
Author(s)	末弘, 美樹
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44857
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【3】

氏　　名	末　弘　美　樹（すえ ひろ み き）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学 位 記 番 号	第　18055　号
学位授与年月日	平成15年6月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学 位 論 文 名	**異文化接触における日本人留学生のアイデンティティ変容－青年女子の英・米語圏留学を中心に－**
論 文 審 査 委 員	（主査） 教　授　木村　茂雄 （副査） 教　授　ヨコタ村上ジェリー　　助教授　日野　信行 助教授　我田　広之

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、日本社会で生まれ育った青年期の日本人、特に女性のアイデンティティ確立の過程を、留学という形の異文化体験を通して検討するものである。特に、彼女たちが国内外で受けた教育の経験や母子関係を中心としたライフヒストリーに焦点を絞って分析する。そして、日本文化・社会で形成された日本人の特徴的なアイデンティティが、異文化に接触することにおいてどのように変容するのか、その過程と特徴を捉えることを目的としている。日本人青年女子の1人1人が、親、特に母親の価値観あるいはその背景にある日本の社会的・文化的価値と異文化の社会的・文化的価値との境界領域で、自己自身のアイデンティティを形成していく過程を、彼女たちが自ら語った生の声から示していく。

これまでの研究においては、複数の文化が交錯する文化境界で起るアイデンティティの危機の問題は、移民やその子ども、混血児などのエスニック・マイノリティや、日本における帰国児童生徒をめぐる言説の中で議論されてきた。しかしながら、本研究は、これらの先行研究で重視されてきた文化的アイデンティティや社会的アイデンティティという側面から「文化的葛藤」の問題を捉えるのではなく、自己の構造の中核としてのアイデンティティの中にその他すべての種類のアイデンティティが位置付けられるという観点から、青年期という人間成長段階における個人のアイデンティティの獲得という側面を重視する。

留学体験という異文化接触が、異文化・国際理解教育、外国語教育、開発教育などの目的を具体化する上で、どの程度の効果があるのかを評価するためにも、日本人留学生が異文化接触によって経験する内的側面の変化を捉えることは重要であると考える。

本研究は全7章から構成されている。

まず第1章では、1985 年以降急増する現代日本人の海外留学生の外的な特徴を把握した。その結果、現代日本人の留学の主な特徴は、10代、20代の青年女子の私費による英語圏留学であることが分かった。

第2章では、先行研究における幾つかの問題点を分析し、帰属意識などの社会的アイデンティティの問題のみから日本人の異文化接触を論じることには限界があることを指摘し、個人のアイデンティティ形成に焦点を絞る必要性を理論的に主張した。

第３章では本研究の枠組みが説明されている。第２章で分析した先行研究の問題点を踏まえ、本研究を行なうにあたっての目的・意義・視点・理論的枠組みを示すと共に、本研究の４つの中心概念であるアイデンティティ、青年期、母子関係、異文化接触を説明し、そして、本研究のキーワードとなるアイデンティティの定義を明確にした。

第４章では、理論的考察で示した仮説を実証的に検討するため、まず、単一文化的・比較文化的視点から日本人青年女子のアイデンティティの特性を捉えることを目的に、４年制女子大学に在籍する４年生 324 名に対して実施した質問紙調査の結果報告ならびにその分析を行なった。質問紙の内容を作成する際、マーシャ（Marcia 1966）の「アイデンティティ・ステイタス地位面接法」を参照した。これは、心理・社会的基準を「自己決定の機会（危機）」と「積極的関与」の２軸により具体的にアイデンティティを測定するという考え方である。但し、マーシャ（Marcia 1966）は、西洋文化・社会に適合する基準として「職業観」「宗教観」「政治観」の３つの領域をアイデンティティの重要な要素に選んでいるが、本研究では、日本人のアイデンティティ形成の重要な要因として「職業観」のみを採用し、削除した領域の代わりに「母子関係」を取り入れた。得られたデータを統計処理した結果、日本文化・社会で形成されるアイデンティティは受動的な側面の強いアイデンティティであることが明らかとなった。すなわち、比較文化的視点から考察した場合、西洋の文化・社会に見られるような、社会と切り離され、主体的に価値基準やものの見方を能動的に選び取る「個」を中心としたアイデンティティの形とは性質を異にするものであった。

このように、伝統的な社会的規範や親の価値基準に沿う形で形成された日本人のアイデンティティは、その社会的規範や価値基準が通用しない状況に置かれた場合、アイデンティティの混乱を引き起こすと予想されたため、第５章では、大学あるいはそれ以降に留学を経験した日本人女性８名と男性７名の合計 15 名を対象に、異文化間的視点から、このようなアイデンティティ特性を持つ日本人が、異文化に接触した時にそのアイデンティティをどのように変容させるのかについて調査を行なった。特に、国内外で受けた教育の経験や母子関係を中心としたライフヒストリーを辿りながら検討した。その際、主に２つの方法論を取り入れた。それは、第４章の調査で採用したマーシャ（Marcia 1966）の「アイデンティティ・ステイタス地位面接法」と、異文化接触における心理的変容を測定するベリー（Berry 1992）の「異文化適応アカルチュレーション態度尺度」である。アイデンティティの領域には第４章の調査で設定した「職業観」と「母子関係」の領域の他に、「異文化接触」の領域を加えた。データ収集の方法としては、異文化接触と自己の構造の中核としてのアイデンティティとの関連性を捉えるためには面接法が最適であるというマーシャ（Marcia 1966）の判断、および個人の語りの中に個人のアイデンティティの形成過程を捉えることができるというギデンズ（Giddens 1991）の指摘を踏まえ、インタビューが最適な方法であると判断し、それを採用した。

以上のような方法により、留学体験者の留学前のアイデンティティ・ステイタスを分類した結果、インフォーマントの中には、予想通り、受動的な側面の強いアイデンティティを持つ者もいたが、予想以上にモラトリアムの状態のアイデンティティであるインフォーマントの数が多かった。そして、受動的な側面が強いアイデンティティを形成している者と同様に、モラトリアムの状態の者についても、異文化に接触した場合、アイデンティティの変容が見られた。それはアイデンティティの混乱を機に、「同化」「離脱化」「境界化」を経て、最終的に理想的な形とされる「統合」へと至る、流動的な異文化適応過程であることが明らかになった。

一方、留学以前から日本文化・社会の中で何らかの人生の重要な事態に直面したために、西洋文化・社会で形成されるアイデンティティと同様の能動的なアイデンティティを形成している者については、異文化接触後もその適応過程は一貫しており、目立ったアイデンティティの混乱は確認されなかった。

今回の調査で得られた結果は、先行研究における問題点から導き出された本研究の理論的な仮説の正当性を確認するものであった。つまり、日本人に関する従来の異文化接触・適応研究では、文化・社会的アイデンティティを座標軸に研究が進められてきたため、その結果に矛盾が生じていたが、今回の調査では、個人の自己の構造における中核となる自己意識に焦点を絞り、座標軸を定めたため、これらの問題点を解消することができた。つまり、異文化に接触することで、これまで問題とされなかったことが、自己の構造にとって初めて重要な意味を持ち、それが自己の中核としてのアイデンティティに心理的な現実として重要な影響を及ぼすのである。逆に、そうした問題が現実的な課題として浮かび上がってこなければ、アイデンティティの危機も感じられないことになる。すなわち、企業派遣者や帰国児童生徒などの異文化接触の形式や、滞在期間の長短を問わず、アイデンティティの危機がその個人にとって問題として捉えられることが肝要なのである。

第６章の調査では、文部科学省の定める教育内容に強く影響されていると思われる高校留学経験者女性９名に対象を絞った。そして海外留学が日本における異文化・国際理解にどのように貢献するのかという関心から、対象者が国内外で受けた教育経験と家庭教育を中心に調査した。調査方法は第５章の調査と同じ方法を採用した。その結果、留学した高校生たちが、異文化接触により、日本社会では得られにくい「自分とは一体何者なのか」という自己意識を問われるアイデンティティの危機を経験していることが再確認された。しかし帰国後は、学校でも家庭内でも「リエントリー・ショック」を経験していることも合わせて確認された。

彼女たちは、米国の学校では自分らしくあることを求められ、それに戸惑いながらもようやく自分が自分であるということに迷いや動揺を覚えずに、帰属集団の中で自分なりの居場所を確保することに成功している。しかし帰国後は、まさにそのことによって家庭内のみならず学校においても、留学前に確保できていたはずの自分の居場所を失う結果となっていることがわかった。すなわち、現在の日本においては、海外留学の経験が異文化・国際理解への増進に繋がっているとは必ずしも言えず、教育改革が叫ばれているものの、日本の教育現場には未だ変化がないという状況が浮かび上がってくる。

また、現代日本人海外留学生の特徴として、次の２点が明らかになった。１つには、特に高校留学の場合、母親の強い推薦があって留学しているケースが多いという事実である。もう１つには、大学あるいはそれ以降の留学については、多くの場合は明確な動機付けや目的なしに留学しているということである。この現象は日本人以外の留学生には見られない特徴である。

それには２つの理由が考えられる。１つには、青年期の日本人の多くが、個人の心理・社会的欲求を得るために留学しているということである。自分らしくあり、また、その自分を社会で認めてもらいたいという欲求を持つことは、人間の心理・社会的発達過程において自然の過程である。しかし、日本文化・社会においては、伝統的な社会的規範や親の価値基準が強い影響力を持っているために、個人の欲求が満たされにくい。そのため、日本人青年女子は自分自身の欲求、例えば「自己実現・自己拡大」、「自己探求」、「親殺しの通過儀礼・自己解放」、「存在価値の確認・自己回復」などを満たすために、留学という形を利用していると考察される。また、もう１つの理由として、1985年以降の時代には、このような日本人青年女子の欲求を後押ししていた背景があったということが挙げられる。つまり、この時代は、女性の社会進出や日本経済の急成長の時代であり、その中で女性の自立がこれまでになく後押しされ、従来の女性の生き方と新しい生き方の間で、一種のアイデンティティの混乱が引き起こされ、それが彼女たちの留学熱に拍車をかけたと解釈される。

第７章は、以上の考察を総括すると共に、今後の課題について述べた最終章である。

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本人青年女性をおもな対象に、留学という異文化接触体験によるアイデンティティ変容の過程を検討したものである。とくに、彼女たちの国内外における教育経験や母子関係を中心に分析し、日本の文化・社会において形成されたアイデンティティが、英米語圏の異文化に接触することでどのように変容するのかについて考察している。

異文化接触におけるアイデンティティ変容の研究は、従来、移民や「混血児」「帰国子女」などをおもな対象としてきた。本論文の斬新さは、第一に、これらの研究で十分に扱われることのなかった現代の留学生に照明を当てた点にある。また本論文は、この問題を、しばしば議論されてきた社会文化的なアイデンティティの観点のみから捉えるのではなく、自己の構造の中核としてのアイデンティティ（末広氏の言う「能動的アイデンティティ」）に、その他各種のアイデンティティは位置づけ得るという視点から、青年期における個人のアイデンティティの変容という面を重視しており、ここにも本研究のユニークさが認められる。そして、このような現代の青年の留学体験と、現在行われている異文化・国際理解教育や外国語教育との関係についても重要な問題提起を行っている。

末広氏はまず、実態の把握が遅れている現代の日本人青年の留学について、日米教育委員会等の資料に基づいて調査し、その目立った特徴が、10代から20代の女性による、アメリカ西海岸を中心とした英語圏への留学にあること

を浮き彫りにしている。この実態を受けて、最初の調査では、現役女子大生を対象にアンケート調査を行い、そのデータを統計的手法も用いて分析した結果、これらの女子大生の多くが、母子関係に強く影響された「受動的アイデンティティ」の特性を持つことを明らかにする。次の調査では、日本人に特徴的なこのようなアイデンティティが異文化接触時にどのように変容されるかという点を、大学入学以降の留学体験者へのインタヴュー調査から分析し、それが多くの場合「同化」「離脱化」「境界化」を経て「統合」にいたっていることを、緻密かつ説得的に解き明かしている。最後の調査では、文部科学省の定める教育方針・内容に直接影響される高校生の留学体験者に対してインタヴュー調査を行い、現在の日本の教育現場には、これらの留学体験を活かして行く態勢が必ずしも整っていない点を指摘している。

本論文は、研究対象としてほとんど手つかずの状態にあった青年期における留学という現象を、以上のように多角的・総合的に分析したパイオニア的な研究といえる。ただし、本論文にも問題点がないわけではない。例えば、本論文が当初目論んでいた青年女性と男性との比較は、結果的に十分に展開されないままに終わっている。また、日本人の留学に関する歴史的な考察や、社会文化的アイデンティティに関する考察にもやや掘り下げの浅い部分がみられる。しかしこれらの不足は、本論文の先駆的な意義を決して損なうものではなく、総合的な評価としては、言語文化学博士論文として十分に価値あるものと認められる。